

J06-03 出艇判断と気象予測

Decision for Outing

100%安全な乗艇環境というのはありません。乗艇ごとに、具体的なリスクを正しく認識し、状況の変化に合わせて、きちんと対処できる乗艇に組み立てることが大切です。

1 安全についての基本 Concept for safety

指導者の安全の判断は、もちろん信頼に足るものでなくてはならず、またその指示に従わなければなりません。同時に、クルー自身も、自分の乗艇ですから自分自身で、毎回の乗艇に、準備が整っているか、気象条件は大丈夫かなどを、判断する練習を積んでいきましょう。それが自立するためにとても重要です。出艇判断を人任せにはいけません。

その中で、「判断や予測は外れることがある。」ことを受け止め、そこでどう安全確保していくかを、考えるようにしましょう。

2 出艇のリスクを把握する Understanding the risk

絶対安全な状態、などはありません。乗艇ごとに、艇の整備状態、体調、気象や水の環境など、条件は様々に変化します。また、「予測」は常に不確実で誤差を含みます。

しかし、「判断」は明確でなければなりません。また、危険とリスク（発生した場合の危険（損失）の重要度×発生確率と考えてください）をよく把握し、判断することが大切です。

また、出艇の判断としては、以下の4つの判断を明確に区別することが大切です。

- 通常乗艇：天候等の不安がない通常の乗艇。
- 注意乗艇：不安があるため、特に注意しての乗艇。
- 待機：様子を見る。発艇を暫時見合わせ待機。ただし次の判断「時刻」を明確にする。
- 中止：乗艇を中止する。

注意出艇とは、比較的大きなリスクをきちんと意識して乗艇しましょうということを意味します。（しかし、実際のリスクは、本当は、通常出艇～注意出艇にかけて、連続的なものです）。待機とは、ぼんやりと待つことではなく、次の判断のタイミングを明確にして、時間を無駄に過ぎないようにする、ということが大切です。

補足：注意乗艇という概念について 一般に、「少しでも不安があれば乗艇しない」と教えられますが、それだけでは安全管理能力は育ちませんし、「潜在的危険者」を増やしているだけです。本来、まったく不安のない乗艇ということ自体、ありえないか、そういうふうに判断するという自体、見落としがあるといえます。

漕艇の安全確保とは、絶対の安全に身を置くことではなく、「人為および自然の危険要素を繊細に把握しながら、危機的状況を回避する技能を習得し、無事その乗艇を終えること」です。それには、「リスクの大小に応じて注意のレベルを設定して乗艇する」という意識が不可欠です。

3 乗艇のリスク把握の要点 Check of Risk

乗艇ではどのような危険が潜んでいるのでしょうか？ 危険要素の詳細はここでは触れませんが、危険要素を見逃さないように、いくつかの危険要素のグループを紹介しておきましょう。

状況把握～予測ミス：たとえば、試合前など乗艇したい気持ちだが、リスクを見逃す、過小評価する恐れを生みます。状況把握や予測にミスを生じる要因がないか、自己検証しましょう。

天候・コンディションの急変：天候は常に変化し、急変する可

能性があります。様々な手段で予測の精度を上げる努力は大切ですが、それでも、絶対確実な予測などはないと考えましょう。

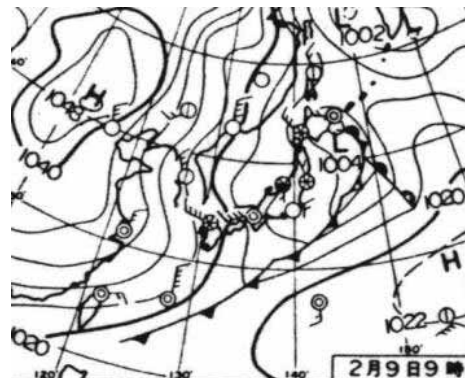
クルーの危機対応能力：漕手や舵手の（競漕力だけでなく）安全対応能力を把握しておきましょう。体調不良なども、大きな要因です。

装備の不調・性能不備：艇の整備状態、老朽化、構造、装備・機能（救命具、浸水時の予備浮力）などを把握しましょう。

沈発生時のリスク：コーチの在否、クルーリーダーの資質、泳力、沈の経験、経験年数、練習強度や疲労度、水温・気温など、沈が発生した場合のリスクを考えましょう。特に、水温との関係では、安全時間（＝水温×3）[分]以内に救助できる体制にあるかどうかが一とつの目安になります。（詳細別記）

4 気象予測 Weather Information

最近では気象情報の精度も上がり、情報を得る手段も、テレビ、ラジオ、電話（177）、インターネットなどと多様です。局地的な天候悪化についてもかなり信頼できる情報が得られつつあります。このような情報に常に耳を傾け、危険な状況ではもちろん最大限の注意をしなければなりません。同時に、情報が絶対確実ではなく、外れることもある、ということをいつも忘れてはいけません。



観天望気：メディアの情報だけでなく、「実際に空を見て、大気からのメッセージ、数時間後の局地的な気象変化を聴こうとする姿勢」；観天望気は何より重要です。「現在の穏やかなコンディションが、後どれだけ続くのか？」様々な自然からの情報を読み、予測と評価を繰り返し、予測水準を向上させましょう。もちろんそのためには、気象学の基本をよく学んでおくことも大切です。楽観視を避け、常に悪い方に予測をシフトし、外れて善し、とする習慣をつけましょう。「綱渡り」は禁物です。

落雷：南アフリカ共和国では、エイトへの落雷・死亡事故が1例あります。水上では、ボートも恰好の標的で、電撃を防ぐ有効な防護手段はなく、水上では落雷地点周辺の広範囲に影響があります。

雷鳴がなったら、いかなる場合も乗艇すべきではない。また雷鳴が止んでからの乗艇再開までは30分の様子を見ましょう。

乗艇中に雷がなり始めたら、早めに岸あるいは橋梁の下に待避しよう。（橋脚状態からは4m以上離れること）。落雷が近くにあり「かなり危険」と感じられる場合には、あまり動かず体を伏せて静かに待つようにしましょう。